

真駒内小学校の使われ方の変遷と計画コンセプトとの関係

正会員 ○ 小林 暁子*
同 森 傑**小学校 使われ方 計画コンセプト
共有スペース ユニット ブロック

1. はじめに

1-1. 目的および背景

本研究では、開校以来46年間に渡る真駒内小学校の使われ方について、特に計画当初には予想していなかった空間利用に注目し分析することで、真駒内小学校の建築計画を時間的文脈の中で再評価することを目的とする。真駒内小学校は東京大学吉武研究室が当時の建築計画研究の蓄積を具体的に設計へ反映した小学校であり、1961年に建てられた公立の小学校としては斬新な計画内容が特徴である。先進的な事例であるため実験的役割が大きかったにもかかわらず、使われ方や利用実態などの追跡調査は実施されず、計画の意義や成果・課題について体系的には整理されていない。

2. 真駒内小学校

2-1. 真駒内小学校の計画コンセプト

一学年4クラスで普通教室24室、特別教室は理科、音楽、家庭、図工の4室で構成されている。

主な計画コンセプトは以下の通りである(図1)。

- (1) 低学年(1、2年生)と高学年(3～6年生)の生活圏を分離(ブロックプラン)
- (2) 各ブロックの共有スペースとして低学年教室にプレールームが接続、高学年教室に体育館・大教室が接続
- (3) 各ユニットの共有スペースとして2教室ごとにワークスペースとトイレが接続

3. 調査方法

平面図を真駒内小学校の統括ファイルに保管されていた校舎平面図、新築工事図面、改修図面、記念誌、避難経路図から得た。平面図は1961～2007年度の46年間で、1961、1971、1972、1979～1991、1993～2007の30年分である。

4. 調査結果

4-1. 真駒内地区・真駒内小学校の児童数

真駒内地区は、1961年に真駒内小学校が開校した当時、児

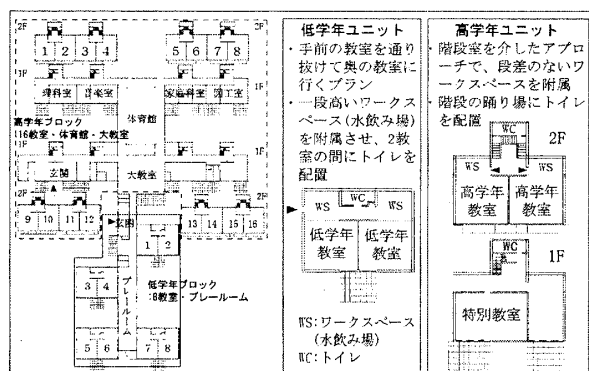


図1. 真駒内小学校の計画コンセプト

童数は371名だった。児童数の増加と共に真駒内小学校に加え、1966年に真駒内南小学校が開校し、1968年真駒内曙小学川南小学校が開校した。1982年に真駒内地区の児童数は4,483名となり、ピークを迎えたが、少子化の進行によって児童数は減少の一途をたどり、2007年は1,437名である。

4-2. 真駒内小学校の使われ方の変遷

平面図と沿革史、児童数の増減から真駒内小学校の使われ方の変遷を以下の4つの時代区分で整理した。

- (1) 校舎建設期(1961～1964年): 真駒内小学校の校舎は、1961年に第一期工事(282坪)、1962年に第二期工事(312坪)、1963年に第三期工事(528坪)と第四期工事(347坪)が行われ、1965年に校舎の落成式を迎えた。
- (2) 児童数急増期(1965～1972年): 1965年から児童数の大幅な増加がみられ、1966年には34クラス1,733名となり、プレールームを2教室、大教室を1教室に間仕切り、普通教室として使用した。1968年には36クラス1,650名となり、プレハブ教室3教室を増築した。
- (3) 児童数安定期(1973～1982年): 1981年に特別支援学級が新しく開かれ、家庭科室、図工室を特支学級の教室として転用したことがきっかけで、1983年に高学年教室を特別教室(図工室・家庭科室)に改築する工事が行われ、特別教室が一つの棟にまとめられた。
- (4) 児童数減少期(1983～2007年): 澄川南小学校が開校し児童数が減少すると、高学年教室を特別教室や会議室に転用するなどをして減らしたため、高学年教室を使用していた3年生が低学年教室を使用するようになった。

5. 分析

本研究では計画コンセプトに着目し(2-1参照)、分析を行った。はじめに低学年と高学年の生活圏に着目し分類を行った。この分類を元に、計画コンセプトにおいて特徴的な共有スペース(ブロック、ユニットごと)に着目し、ヒアリング調査から得られた使われ方の実態も含めて空間利用の有効性について分析を行った(図2)。当初の計画コンセプトと使われ方が完全に合致していたのは1973～1977年、1980年の6年間だけであった。

5-1. ブロックごとの共有スペースについて

- (1)A. 低学年がプレールームと接続、高学年が体育館・大教室と接続(計画コンセプト): 低学年がプレールームに接続した場合は「高学年から守られた楽しい場所だった」、高学年が体育館・大教室に接続した場合は「休み時間によく遊んでいた」ということから、低学年と高学年ブロックに共有スペースを接続させた計画コンセプトは十分に機能していた。
- (2)B. 低学年が体育館・大教室と接続: 「学年行事を大教室で行っていた」ということから、高学年ブロックの共有スパー

The relation between the change of utilization in spaces and the planning concept on Makomanai Elementary School

KOBAYASHI Akiko and MORI Suguru

スは低学年にも有効に利用されていた。

(3)C. 高学年がプレールームと接続：「3年生の教室がプレールームに接続したが、1,2年生のための場所なので、3年生の利用は遠慮するように言っていた」ということから、低学年ブロックの共有スペースは高学年には有効に使われた。

5-2. ユニットごとの共有スペースについて

(1)a. 低学年が低学年棟の教室を使用、高学年が高学年棟の教室を使用（計画コンセプト）：低学年ユニットの共有スペースは「授業のグループ活動や絵を描く時に活用していた」「お漏らしをする子が多かったので、トイレが近くにあって助かった」ということから、低学年の児童に有効に活用されていた。高学年ユニットの共有スペースは「2クラスで1つの繋がりがあり、休み時間に隣の教室に良く遊びに行っていた」ということから、2教室間の強い結びつきが誘引されていた。児童数が多いときは1学年4クラスであったため、2クラスごとにユニットが分かれてしまい、ユニットをまたいでの交流が生まれなかった。近年は児童数の減少で1学年が2クラスになり、総合学習の時間に2教室を行き来して調べ学習を行うなど、当初の計画コンセプトを上回る有効な使われ方がされている。家庭科室と図工室を特別支援学級に転用したことで、上階の高学年の児童が休み時間に遊びに行くなどの交流は活発となった。しかし、結果として特別教室が一つの棟にまとめられ、「授業以外には行かず、怖いイメージがあった」ということから、普段は児童が立ち寄らない場所となり、有効に利用されにくくなった。

(2)b. 低学年が高学年棟の教室（普通教室・特別教室）使用：低学年が高学年棟の普通教室を使用した場合は「居心地が良かった」「隣の棟の5年生とは交流することはなかった」ということから、高学年棟の普通教室はそれぞれのユニットで独立しており、低学年の領域は守られていたと考えられる。低学年が高学年棟の家庭科室を間仕切り、教室として使用した場合は「高学年が家庭科室を使用するときは、2年生が家

庭科室を出て、高学年の普通教室に移動して授業をしていた」ということから、利用に不便が生じていた。

(3)c. 高学年が低学年棟の教室使用：低学年棟のトイレは男女兼用で、廊下を通る人から見えるつくりである。「3年生の男子児童が、トイレに行くことができなくなり、空き教室のトイレを利用して、男女分けて使用するようになった」ということから、高学年が低学年ユニットの共有スペースを使用するときは不便が生じていた。低学年の児童がいつでもトイレに行けるように教室近くに配置したコンセプトが有効に機能していなかった。

6. まとめ

真駒内小学校はその生活圏を明確に分ける計画コンセプトから、低学年と高学年の交流が生まれにくい校舎のつくりであったといえる。つまり、低学年と高学年の生活圏を分離するブロックプランは、児童数が多い時代に幼い低学年を保護するために考えられたプランである。しかし、近年では児童数が少ないため、低学年が大教室や体育館で遊ぶ場合もあり、計画当初のような完全な生活圏の分離ではない状況へと変わってきている。例えば、各ブロックごとの共有空間を有効に活用して、縦割り学習や交流給食を行うことや、高学年が低学年教室にお世話をしに行くことなどにより、低学年と高学年の交流が試みられている。今後の日本の小学校は、児童数の減少や学習指導要領の改訂、統廃合問題など、更に多くの問題を抱えることになる。将来を見据え、時代の変遷に対応できるような小学校の計画が不可欠となる。真駒内小学校の46年間は、児童数の増減、教育方針の変更などの要求に、教職員が工夫しながら校舎を使用してきたわけであるが、特に近年の少子化という状況においては、ブロックとユニットにおける共有空間が、利用者の積極的なマネジメントの工夫を引き出すきっかけとなり得ている。本研究によって、時代の変化へ対応するマネジメントの工夫を引き出す建築計画として、真駒内小学校の再評価の一端を示し得たと考える。

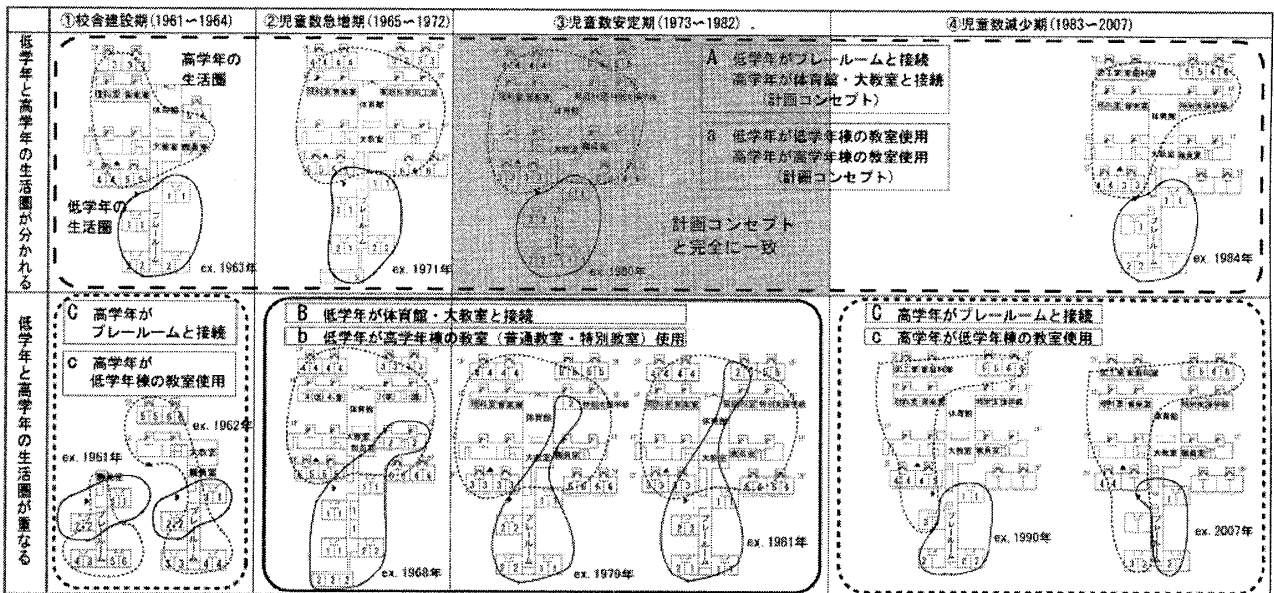


図2. 低学年と高学年の生活圏、共有空間の接続による分類

* 北海道大学大学院工学研究科 修士課程

** 北海道大学大学院工学研究科 准教授・博（工）

*Graduate Student, Graduate school of Eng., Hokkaido Univ.

**Assoc. Prof., Graduate school of Eng., Hokkaido Univ., Ph.D.in Eng.